黒い竜と白い竜

タカチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒い竜と白い竜

【Ｎコード】
Ｎ８１９６Ｚ

【作者名】
タカチ

【あらすじ】
俺は落ちこぼれとして生きてきた。きっとこれからも同じだとあきらめていたが、ある日一匹の竜と出会い運命の糸に大きく翻弄されることになる。
車は浮かないが、竜が飛んでいたり、軌道エレベータがあったり麒麟が駆けたりする世界で２匹の竜が作り出すストーリー。

文才など一切ないので、細かいところを気にしないで頂けると幸いです。

出会う（前書き）

かなり前から自分の中で妄想していた物語です。
自分がどこまで続けられるか分かりませんが頑張っていきたいと思います。

一応バトルも起こり、どこまで描写するか分からないのでＲ１５をつけさせて頂きます。

出会う

朝焼けの時が終わろうとしていた。
そして、夕闇の時が目を覚まし身動ぎを始める。

（ああ……、そろそろ起きなければ。私の守るべき人が生まれてしまう。）
まだ覚醒しない意識のなか最初に思った言葉がそれだった。
あの人の面影を見つけては喜びを感じる自分に憤りを覚え、それを望んだあの人には若干の憎しみをこめる。

まどろみの中過去を思い出していると不意に言葉が落ちてきた。
「起きたかな？」
この領域に私以外で唯一入れる人物。
ここなら本来の姿で良いのに彼はまだ人の姿をしていた。
「今、起きる」
腹ばいになっていた身体を起こし、一息ついてから借りの姿になる。

「相変わらず君の姿は圧巻だね」
「私は白の方が好きよ。真っ黒だと気分が落ち込むわ」
「こっちは、こっちでめんどくさい事も多いけど」

互いにくすくすと笑い、久しぶりの会話と楽しんだ。
毎回覚醒時にはこのようなやり取りが繰り広げられる。

「ところで、頼みがあるんだぁ」
いつも以上の笑顔を彼は私に向けてきた。

なに？と聞き返す所で、彼女の意識がぼやけ始めた。
「え……？」
「僕、少しやりたい事があるからまた暫く寝ててくれない？」
へたり込んだ身体が言う事をきかない。考える事も億劫になってくる。
（そんなことしたら、バランスが崩れて世界がめちゃくちゃになる……！）
「大丈夫だよ、３０年ですべて片づけるから。すべて終わった後に、君を起こして上げる」

「こんな世界は替えた方がいいんだよ、一回リセットしよう」

出会う（後書き）

すこしキャラの口調を変更しました。

日常

２月１４日、明後日は俺の誕生日俺にとって人生を左右する大きな意味を持つ日だ。
普通の１４歳はこんなに悩んでいないと思う。

皆生まれて直ぐか、１５歳になるまでには加護を貰う。
貰わない人間もいるが少数だ。この少数には決して入りたくない。
加護を貰っていないからと言って、差別されることはない。公には……。

「ああー、俺の人生もここまでか……、短い人生だったなー」

学校の帰り道に独り言を言う。加護がないからと言ってあからさまな苛めを受けたことはない。これから加護を貰いクラスの子の守護龍や精霊を超える何かを連れてくるかもしれないからだ。だからクラスの皆は仲好くしてくれている。

しかし、明後日からは違う、確実に加護を貰えない。そんな弱い人間を中学生が放置しておくわけがない。

「くそー、彼女も出来ないまま終わるのかよ」
「そんな卑屈な奴に彼女は出来ませーん」
「どっから出やがった！」

こいつは幼馴染の清水ハルカだ、馬鹿力で成績優秀、見た目も愛らしく俺以外には優しい。まったくもって迷惑な性格をしている。

「はー、お前にはわからないよ。生まれて直ぐに麒麟に愛される人

間なんだからさー」
「そーゆー所でひがむのは悪い癖だよ？それに明後日までに守護が貰えるかもしれないし。」
「楽天的でいいよな。最近夢見も悪いし良いことねーな」
「もらえなくても、あんたには私が付いているんだから問題ないでしょ！！」
バシーンと背中を思いっきり叩かれる。
なんだこのツンデレは、馬鹿力がなければ萌の１つくらいさし上げるんだが。
「で、どんな夢見てんの？」

顔が赤いから照れ隠しがばればれなんだが……。
ここで指摘しても第二撃を食らうので指摘はしないでおく。

「ああー、女の人が寝てる夢、で俺に似てるけど俺じゃない男の人が俺を連れて女の人の方へ行こうとするけど、そこで起きちゃうみたいな？」
「いやいや、全然意味わからないから。ちゃんと聞こうとした私がバカだったわ」

そこまで馬鹿にすることないんじゃないかと思いながら話を続ける。

「女の人を起こさないといけないんだが、どうしても前に進めないんだよね」
「その人に見覚えは？」
「ない……、かな？」
「かなってなによ？」
「寝ているからよくわからない。でも髪の長い人だよ」

その後はハルカが最近見た夢の事を話してくれたり、明後日の予定

をそれとなく聞かれたりした。

ハルカを家まで見送る。（俺の帰り道にあるため寄り道ではない）

一人になって夢について改めて考えてみる。

まず男の人は誰なんだろう？

俺の未来の姿？なんか違う気がする……、女の人はあの人の知り合い？必死に起こそうとしてるしなー。

うだうだ考えていると家についてしまった。

「ただいま」

「兄ちゃん、俺今から遊びに行ってくるから。お母さんに言っておいて」

「おう、飯までには帰ってこいよ」

手をふり行ってしまった。

弟の幸樹は兄が見ても見た目が良い、そして、大精霊の加護を受けている。

精霊は加護を与える者にちょっとした幸運等を与え、大精霊はそれを他人にまで分ける事が出来る。そして、それぞれの特性に合わせた能力を使う事も出来る。

「俺も精霊で良いから加護が欲しい……」

運命の日

それから再び目覚めるまで煩わしい夢は襲ってこなかった。

朝ご飯を食べ損ねた俺はコンビニに向かう。

弟にプリンも頼まれてしまった。どちらが兄かわからないな……。

コンビニで朝ご飯兼昼ご飯を購入し帰宅する。

重いビニール袋を下げて、家の桜の前を通り過ぎようとしたらいつもと違う光景が広がっていた。

髪の

長い

女が

倒れていた。

「え……、これは夢？俺まだ寝ているのか！？」

バタバタと自分の体を触り、ついでに頬も抓っておく。

「痛い」

てことは夢じゃない！倒れているなら具合が悪いわけだからー、と思い駆け寄る。

「大丈夫ですか！？救急車呼びますか！？」
肩をたたくが反応がない。
うつ伏せになっている体をゆっくり仰向けにして気道を確保する。
脈はある。自力で呼吸もしている。これ以上は俺では手の施しようがないと思い、家に助けを呼ぼうと彼女の傍を離れようとした。

しかし、それは彼女によって阻まれる事となった。
手を掴まれ、まるで逃がさないとでも言うように鋭い眼光で睨んでくる。

「だいじょうぶ」
掠れた声で女がつぶやいた。

「大丈夫って倒れている人に言われても信用できないのですが」
「お腹すいているところ無理して動いたから倒れただけ。だからご飯をくれたら動けるようになる」

あれ？もしかして俺たかられている？そんな慎ましい表情で見られても俺は動じない。
なぜなら俺の弁当を狙っているふとどき者に変わりはないからだ！

「ご飯くれたら良いことしてあ・げ・る」

囁かれてしまった。こんな美人に囁かれて動じない男はいない！！
ごめん母さん俺大人になってくる！！

「は……はい！」

あ、声が裏返ってしまった。恥ずかしい……、変声期早く終わらないかな。

頭が変な方向に暴走しかけたが、とりあえず家に上がってもらい、俺のご飯を分けてやろうと思う。

「そこに座っていてください」

今の炬燵に案内し、お茶を入れる。
好みを聞き忘れたから煎茶で良いだろう。

「おまたせしました。ってなにしているんだよ！」

彼女は仏壇に線香をあげ、手を合わせていた。

「勝手にごめんなさい。少し懐かしかったから、私君のおじいちゃんの知り合いなの」
「あー、だから家で倒れていたんですねー、ってせめて家を訪ねてから倒れてくださいよ」
なんかこの人と居ると疲れる。

自称おじいちゃんの知り合いは、俺のパンを奪い食べている。
なんとか守り抜いた弁当をコーラで流し込みながら俺はふと疑問に思ったことを口にした。

「ところで、どちら様ですか？」
「そういえば、自己紹介がまだだったね。えっと、黒雛と言います」
くろびな？変な名前、この人ほんとにおじいちゃんの知り合い？

「高取雄輝です。おじいちゃんは2年前に亡くなりましたが、どちらでお知り合いになったんですか？」
「かれこれ１２４年前かしら？最後に会ったのは敏君がまだ１０歳のころだったわ」

え……？この人電波な人？つうか、おじいちゃんの名前違うし！
変な人にはなるべく早く帰ってもらおう。

「えっと、祖父の名前は敏ではないのですが？」
「え！！あーごめんなさい！じゃあひいおじいちゃんかな？。やっぱり長く眠ると時間の感覚狂うわね」

（やばいこの人）
「やばいってひどいわねー。私はこの家の守り神やってるのに！もー知らないどっか行っちゃおうかなー」
「え！聞こえちゃった！？それより神様ってホント？」
おかしな人の設定が気になって、つい質問してしまった。

「ほんとほんと。あの桜いつも綺麗に咲くでしょ。あれは君の先祖と約束した時に埋めた桜でね、あれを通してこの家を守ってたわけ」

うわー、神様すごーい、俺の先祖すごーい。
でもなんか嘘くさーい。

「でもなんで神様がなんであんなところに倒れていたの？」
「話せば長くなるのよ……」

神様はいきなり落ち込みだした。
そして俺の運命を変える一言を言い放った。

「そうそう、君誰からも加護貰ってないでしょう？」
「まぁ……」
神様まで俺を人間失格扱いするのかと思って頭に熱が登るのを感じた。

「そんなに睨まないでよ。それはしょうがない事だったんだから」
「しょうがないって、なんで初対面の人に言われなきゃいけないんだよ。神様だろうがなんだろうが知らないが、俺がどれだけ悩んできたかわからないだろう！？」

これまでされてきた差別的な言動は俺の心に十分な傷を負わせていた。

神様は申し訳なさそうに目を伏せごめんなさいと呟いた。
「実は、あなたが生まれる段階で私が加護を与えることになっていたの。あなたのご先祖との約束でね。でも、白が邪魔をしてきて私を再び眠りにつかせた。だからあなたに加護を与えるのが遅くなってしまった。本当に申し訳ない事をしたと思う」

神様はペコリと頭を下げた。

「あんたが俺の守護者？」
「ええ……、黒龍それが私の本当の姿」

信じられない。今まで夢にまで思っていた事が叶うなんて。
しかもこんなにも位の高い龍が。

黒と白の龍は四大元素の龍とは異なった力を持ち、この世の理にすら影響を与えるという龍だ。
（一般的には……、お父さんが家の言い伝えを話してくれたのはいつだったろうか、その中で何か重要な事を言っていた気がするが、思いだせない。）

「雄輝に加護をあげたいのだけど、先に言わないといけない事があるの
・私は今、万全ではなく本来の半分ほどしか力が出せない。
・白龍に狙われているから、確実にあなたを危険にさらす。
それでも良かったら加護を与える事ができる」

俺の返事は決まっている。
この喜びをくれるなら、俺は黒雛のために戦う覚悟が出来る。
「加護が欲しいです。あなたのことも全部受け入れます！」

（あれ、でも白って……）
「わかったわ。私の加護をあなたに授けます。」
俺の手をとり、彼女の額近くにもっていき手の甲をおでこに押し当てた。
一瞬鳥肌が立った後手の甲に温かいぬくもりを感じた。
相性はよかったみたいだ。
合わない相手に加護をもらうと激痛が走ると聞く。
そして、止まっていた俺の運命の輪が一気に回りだした。

2月13日　夜

2月13日夜
両親に黒雛の事を話したら大層喜んでいた。そして、両親は黒雛を14年間待っていた事を伝え、今の世界情勢、曾祖父のことなどの話をしていた。

俺が加護を受けなくても妙に騒がない両親を怪しんだのは一度や二度ではない。俺は要らない子供なのか、何も期待されていないのか等を考え枕を濡らした日もあった。

（知っていたなら教えてくれれば良かったのに、そしたらこんなに悩む事もなかった。）

弟もまさか誕生日一日前に兄が龍を連れてくるとは思わなかったようで、なんだか微妙な反応をとっていた。

（あいつは大精霊の加護を受けて天狗になっていた面があるから、ちょうどいいお灸になったと思う。俺も兄の威厳を取り戻せて凄く嬉しい！）

実はクロに大精霊がなついてしまい、戸惑いと若干の嫉妬を感じていたのであって、雄輝が考えているようなことは一切なかった。

自分の部屋に戻り、俺はベッドに座り黒雛は向かいの学習机の椅子に座った。自然と向き合う形になり、俺は気まずさを紛らわすために話しかけることにした。

「なあ、黒雛さんはなんで白龍に襲われたの？」
「その名前は好きじゃないから、クロって呼んで？」

（今更名前の訂正かよ！）

「あはは、ごめんごめん」
ごまかしたように笑ってるけどこいつ俺の心が読めているのか！？
確か、昼もこんなことがあった気がするし。

「もしかして、心が読めたりするチートパワーがあったりしますか？」
一応聞いておこう。心の安寧のために。なんか涙でそう。

「うふふ、チートパワーの意味はわからないけれど、心は読めない。でも君たち一族とは付き合いが長いからね。顔を見ただけである程度はわかるようになったのさ」

おどけてるというかヘラヘラしているというか。なんかすごい龍って感じがどんどん薄れている。

「なんで白に眠らせられたかわからないのよ。でも、彼はこの世界が気に入らないようだったから、手っ取り早く破壊活動していると思ったのだけれど、無事のようだし」
さらりと危険な事を言いましたよね？ごくりと唾を飲み込む。

「暴れられたら、被害規模はどれくらいに……？」

クロは胸の前で腕を組み考える素振りをみせた。胸が強調されてグットです！

「止めが入らなければ1カ月もあれば何とかなるはず。破壊状況にもよるけど。今、白が眠っている夕闇どきと思って、太古の龍達はぼけーとしていると思うから、きっとそれも狙っているのでしょうね」

太古の龍？初めて聞いた単語に思考が引き寄せられた。
古い龍？一般的な龍は５００～８００年の寿命を持つとされる。

「太古の龍って何？」

クロが驚愕の目でこっちを見た。

「え……、まさか人間はこんなことまで忘れているの！？」

そんな言葉聞いたことないし、長生きの龍になる予定の龍は目の前にいるし……。
（馬鹿にしたような目で見ないでください。心が折れてしまいます。）

「俺が知らないだけでほかの人なら知っているかも……？」
クロに睨まれ続け最後のほうの言葉は消えてしまった。

「また、仕事が増えたわね。まあいいわ。これは明日説明します。今日はいろいろあって疲れていると思うから寝なさい」

それには賛成なのだが、なぜ俺の部屋に布団を敷く？
「あれ？今の私隠業出来ないって言ってなかったかしら？」
全然聞いていないので首を振った。ちょっと頭がフラフラする。
「隠業すると白にばれちゃうのよ。だから、しばらくは実体化したまま過ごすことになります。だから明日は買い物に連れて行ってね」
ハートが飛び出すようなウインクをされても嬉しくない！
うら若き男子が元はなんであれ、綺麗なお姉さんと寝るのは精神衛生上宜しくない！

襲ってもいいけど、後悔すると思うから気をつけてね。という嬉しいような悲しい言葉を残してクロはさっさと寝てしまった。

（クロも疲れていたのか、そりゃあ、家の前で倒れていたしなー）
ごちゃごちゃと考え事をしていたが、瞼が重く感じたと同時に寝てしまった。

寝たのかな？
今日は疲れた。熟睡していたところ叩き起こされるし、弱っているところに加護を与えたし。
しかし、この子はあの方によく似ている。顔も声も、性格はまあ違うけど……。
もしかしたら白はこのことに気づいて契約を妨害しようとしたのか？
しかし、ここまで忘れられているとは、私たちの存在意義もあった

ものではないわね。世界は人間のためだけにあるわけではないから構わないのだけれど。とにかく一回おじい様に合わないといけないわ。飛べばあっというまに行けるから、雄輝も連れていきましょう。

白は何をしようとしているのかな……。

クロは対の存在のシロに思いを馳せながら眠りについた。

2月14日　日曜　（俺の誕生日）

2月14日　日曜　（俺の誕生日！）

くぁー、と欠伸が聞こえてきた。昨日から俺の部屋に居候している龍の声だろう。

からかってやろうと思いベッドから寝ている姿をのぞきこんだ。

枕に黒くて長い髪が広がり、シャツが大きいのか首筋から肩までが露わな姿になっていた。

朝なんだから男の子に不用意な刺激を与えないで！

寝ている顔だけ見ていると、肌が透けるように白く人形のように整った顔をしている。そういえば、他の龍をマジマジと見たことはないが、髪や瞳の色が属性の色に対応していると聞いたことがある。

黒目黒髪、改めて、黒龍なんだなとしみじみ考え、言われなければ龍だとは気付かないだろうなと思った。

暫く眺めていたら突然クロの目が開かれた。

眺めていたわけだから必然的に目があってしまう。

気まずい沈黙が流れ、クロににらまれ続けることになった。

「ねえ、なんかいやらしい目で見ていなかった？」

う……！

「見てねーよ！」

正直に見とれていましたなんて言えねー！！

「まあ、見られて恥ずかしがる年齢はとうに超えているから気にしてないわ。遠慮せず触っても良いのに」

ニタニタ笑いながらクロは俺を言葉攻めしてくる。

こういう趣味の友達がいるから紹介してやろうかなと思いつつ、どぎまぎした気持ちを落ち着かせることにした。

朝ご飯を食べ終わった頃に今日の予定を聞かれた。

「ああー、遊ぶ約束はしていない。夜に帰れればそれで良い」

誕生日会を開く歳でもないしな。決して友達がいないとかではない。断じて違うぞ！

「そう、じゃあ今日はさっさとおじい様のところへ向かい、私の買い物をしてから、雄輝に加護の引き出し方を教えましょう」

クロはうんうんと一人で頷いている。

俺の事は後回しですね。わかります。

（早く加護の力使ってみたいな……）

「雄輝の訓練はいつまでかかるか分からないから、後回しよ？だいたいお母さんに進学の事とか全部任せてあるのだから時間なんていくらでもあるでしょう？」

うわー、言われたくない所言われちゃった。耳が痛いね。
そう、自分の守護者によって学校が変わるのだ。雄輝の場合2月に入ってから、契約を結んだために、今まで入る予定の一般高校から、龍の加護を持つ子供が通う高校へと進路が変わってしまった。
（龍属性専門第一高等学校か、クラスメイトも数人行くはずだから不安はそんなに感じないけど……）

主な教育は一般教育、龍の加護の使い方等である。そして、龍の加護は戦闘向きの力が多く、戦闘訓練や、国防についてなども教えられ、この学校をでた生徒は戦争時に駆り出される制約がある。それが嫌で一般高校に通う人もいる。

しかし、この学校に通えるというのはエリートの証であり、学費も格安、これからの人生に明るい光が差し込む事間違いなしである。そのほかにもいろいろ特典盛りだくさん！

「じゃあ早くおじい様とやらに会いに行こうぜ」
「そうねー。寒いと思うから、なるべく厚着してきて。私は外で待っているから」

クロはそそくさと外に出てしまった。
あいつは炬燵に未練を感じないようだ。なんとうらやましい能力！

ニット帽をかぶりマフラー、手袋つけコートを羽織り準備万端、どんな寒波でもきやがれ的な装備で外へ出たら目の前が真っ暗になった。

「へ？」

黒くて

細長い

角が生えた

龍が俺を見下ろしていた。

リニアで行くんじゃないのか……、つうかクロはリニアってしっているのかな？

つか行き先どこ？

呆然と立ち尽くし、クロの艶やかな鱗を眺めていたら上から声が降ってきた。

「早く乗りなさい」

「飛んで行くの？」

「もちろん」

「遠いの？」

「飛んで1時間くらいかしら」

「リニアで行かない？」

「なにそれ？」

「ワァオ」

結局飛んでいく事になりました。

（お母さん、死なないように祈っていてください）

「雄輝、私は載せた人を落としたことがないのが自慢なのよ？」

「俺が落下第一号にならなきゃ良いけど。あと心を覗かないでください。死んでしまいます」

初めての空はそんなに苦痛ではなく、むしろ癖になる類のものだった。地上を見下ろし風が当たる感覚を楽しんでいるとあっという間に目的地に着くことが出来た。
のも足りない分は帰りに楽しもうと思う。

会いに行こう

鬱蒼とした木が茂り冬の割に生温かい風が吹く場所に連れてこられた。
どこからか硫黄の匂いがするから温泉があるのかな？

「着いたわ」
ぜえぜえぜえ……、
クロがものすごく疲れ果てている。顔色も悪いしふらふらしているし。

「ちょっと休もう！なんで死にかけているんだよ！？」
「久々に飛んで、ちょっと呼吸がしにくかっただけよ。普段は隠業して行動するから、飛行は慣れていないの」
「さっき、人を落としたことないって言ってなかった！？俺だまされたの！？」
「はぁ……、落とした事はないわよ、だってあんまり載せないもの」

やっと息が整ったのか会話がスムーズになってきた。

「詐欺に遭った気分」
「楽しんでいた癖に良く言うわ。帰りはもっとスピード出して上げるからね」

うわー、こんなツンデレいらないです。誰か俺にデレデレな子をください！切実に！！

「所で、おじい様ってどんな人？」
「太古の龍の一匹で、東の観察者よ。創世期あたりから世界を観察している方で、とっても大きいの」
「漠然としすぎていて全然わからない」
（だから、馬鹿を見る目でこっちを見ないで！）

「私や白が困った時にアドバイスを求めたり、天変地異が大きすぎて、私たちの力だけじゃあ足りない時に力を貸してもらっているのよ。最後にあったのは北の方の火山が爆発したときに力を貸してもらったわ」
（あとは、私たちが力を暴走させてしまった時のストッパーの役目も負っているわ）

北の火山って何年前の話だ？クロの話している昔話はいまいち時間の感覚がつかみにくい。

「観察者の割に結構活躍していない？」
「まあ、観察対象がいなくなったら困るでしょう？これは人間だけでなく他の生物も含めだけど。では、おじい様に会いに行こう」

腰かけていた岩からおり、苔むした倒木の上を歩いていく。
神聖な空気というものはこういうものを言うのだろうな、と思わせる空気が徐々に濃くなってきた。ちょっと息苦しい。クロみるとイキイキしているように見える。
クロも神聖な生物のはずだから当然か。

（俺、どうせ汚い人間ですよ……）

しかし、大きいと言っていたから直ぐに見つかると思ったがそうで

もないらしい。
しばらく歩いていても、それらしきものが視界に入ることはなかった。

そうこうしていると、大きな湖の前に出てしまった。靄がかかって見えにくいがかなり広い湖だと思われる。
周りには時期外れのツツジ等が咲いていた。きっと一年中暖かいのだろう。

「何にも見えないんだけど。それに、これは温泉？」
「そうそう、温泉。ちょっと温めだけれど」
クロは手をお湯に付けて温めていた。俺もマネしよう。

「お湯のわりにヌルついている気がする」
「これがお肌に良いんだって。お母さんがいっていたわ」

昔を思い出したようで目を細め遠くを見つめている。
クロの昔なんてさっぱり想像できないけど、纏った空気が柔らかい事からきっと良い思い出だったのだと思う。

「さて、おじい様の許へ行きましょう。私と手を握ってくれる？」

差し出された手は温泉を触った手で、手を繋いだ後に後悔と煩悩が押し寄せた。
暖かくて、ぬるぬるしていて、クロの手は柔らかくて、最高です！！
でもその後の行動で一気に現実に引き戻されることとなった。

「そのまま入ったら溺れるって！一緒に入水でもすんの！？俺まだ

死にたくないよ？」

何とクロは湖に入り始めたのだ。温泉に入りたいと思っていてもこんな状況では楽しめるはずもないし、溺れてしまう。

「大丈夫、おじい様の領域に行くだけだから」

そう言って俺も湖の中に引きずり込まれた。

あんまり泳げないんですけど……。

おはよう

溺れるのを覚悟して息を止め眼を瞑っているとクスクス笑われていることに気付き、クロの手を握り締め恐る恐る眼をあけると目の前には草原が広がっていた。
緑の絨毯が広がり、野兎が駆け、小鳥が舞っているさまは、まるで絵本の世界のようでここが湖の中だとは思えない。だが遥か上空には水面が映り、静かに波を立てているのがみえる。

その中でも一際目を引くのが薄ら灰色と緑を基調とした小山だ。岩山のようで、表面はごつごつとしている。高い木は生えていなく、苔や低木、野草などが生えている用だ。

なんとなく予想は付いているが質問をしようと思う。

「もしかして、あれがおじい様？」
「はい、今日は一段と苔むしているようですね」

そうかー、いつもより苔むしているのか。ところで呼吸している様子すらないのだが、生きているのだろうか。ちょっと心配になる。

「さて、起きていただきましょう」

クロは繋いでいた手を離し、水面に向かって手を伸ばし何やら掴んで引きずり下ろす動作をした。

それからの光景は衝撃的だった。

それは、風呂の水が抜けている様子を下から見ているようで、上から落ちてくる水の柱が岩山に落下し水圧と水流で苔や低木をはぎ取りみるみる白亜色に変って行った。
そして、水は高いところから低いところへ流れるので濁流になって俺たちに押し寄せる。

「ちょっと、待ってー！！水来ているから！！」
「大丈夫大丈夫、この水は常に上にあるように設定されているから。私の力が関与しなくなれば上に戻るわ」

濁流が来るのに平然としているあたりが人間とかけ離れているが、せめて俺にも教えて欲しかった。教えていてくれればこんなに取り乱したりしなかっただろうし、こんなことが続いたらびっくりしすぎて髪がすべて白髪になってしまう。

「派手な行動をとる時は前もって言っておいてくれない？俺寿命が縮みそうなんだけれど。さっきもいきなり池に入るとか止めて欲しいし」
「あれ、もしかして雄輝は意外とビビりなんだね。これは驚かし甲斐があるってものじゃないの！」

もしかして、いたずらっ子キャラですか？いい年こいた龍が？身体は大人、頭脳は子供とか止めてください。

そうこうしているうちに、水が一か所にまとまりだした。大きい水滴の様な形になったそれは、僅かに薄くなった水面に吸い寄せられるかの様に上空に戻っていき、タプンという音と共に一つになって行った。

次に地響きの音が聞こえてきた。ズズズ、ズズズ、ズズン。目の前にいた大きな龍がこっちを向くために移動を開始したのだ。
おじい様とやらは、４足歩行型の竜でどっしりとした足つきでこちらに向かって来ようとする。
少し怖い。

龍にも様々な大きさや色形がある。一般的に西洋型のドラゴンや、東洋型の龍、そしてトカゲの様な４足歩行型の龍などである。
四足歩行型でも飛行することは可能だがドラゴンや龍のように速度は出せない。しかし、土の中を高速移動できるというメリットがある。そして、だからと言うべきか土属性の龍に４足歩行型が多い。

ちなみにクロは東洋型の黒い龍だ。サイズは変更可能らしいが、通常サイズは長さが約１キロの太さ直径で１０メートル～２０メートルらしい。本人もしっかり計った事はないと言っていた。
俺が背に乗せてもらった時は５～８メートルほどの長さだったようだ。

おじい様の移動は３分ほどかかり完了した。

「おはようございます」
「おはよう」

おじい様の声は素晴らしく低く、地響きがまだ続いているのかと思うほどだった。

「私は常々言っていると思うが、水をかけて起こすのはやめたまえ。年寄りにあった丁寧な起こし方があると言っておろう？」

「しかし、直ぐに起きて頂きたかったもので」

クロはしらーっと言っているが、こいつ次もあの起こし方をするつもりだな。暇なときでも絶対にあれをやるぞ。そして、おじい様の前だと幾分かしゃきっとする様で、いつものふざけた雰囲気は伝わってこなかった。

「お伝えしたい事があります」

「ふむ、なんだい？」

ちなみに俺やクロのしゃべりの速度を1とするとおじい様は5位になると思う。これは増えるほど遅くなる。様はおじい様しゃべるのめっちゃ遅い！

そしてクロは目をつぶり無言になった。これは思念での会話をしている様子だ。龍や麒麟が会話するときに使う方法で、これならおじい様の会話速度が上がるだろう。

俺には聞こえないけど。

（いつもどおりでこれなのか、俺に聞かれたくないからこれなのかはさっぱり分からないが）

長くなりそうなので草原に座り野兎と遊ぶ事にした。人懐っこい様でなでられていると目を細め喜んでいるようだった。

３０分ほどそうしていると会話が終わったようで、クロとおじい様は別れのあいさつをしている。
おじい様は俺にも別れの挨拶をして再び蹲る様にして眠った。

後から聞いた話だがおじい様とクロの血は繋がっていない。他の龍と違いクロたちは世界が前任者の寿命を感知すると、前任者の前に卵が現れると聞いた。そして、前任者は次の代の教育が終わると世界に同化し生涯を閉じるらしい。

何だか龍の世界って複雑。

2月1日　夕方

2月14日　夕方

疲れた。只ひたすらに疲れた。
女との買い物は疲れる。という知識は持っていたが実際に経験したのは初めだった。
母親もハルカも買い物は即断即決の人種のようで、買い物に付き合わされてもあんまり疲れない。
（たまに意見を求められるのはしょうがないと割り切っている）

宣告どおりに買い物に行ったのだが、クロは久しぶりの買い物ということで大はしゃぎをしだした。
連れて行ったのが大型ショッピングモールだったのも不味かったかもしれないが……。

まず入り口あたりにある黄色い店に興味を持ったようで、きらきらした目で見つめている。
あの建物はどう見ても買い物に関係ないぞ！

「あれは何？」
「あー、宝くじ売り場」
「宝くじ？」

なにそれ？とでも言うように首をかしげている。見た目は大人頭脳は子供！クロ、アホぽいからやめるんだ。お兄さんに見つめられているぞ。お願いだからナンパとかされないで。

「お金を払ってくじを買うところ。当たるとお金が貰える」
「やりたい！」
即答だ。
すがるような眼で見ても、買えないんだなそれが。
「おー、お姉さん。僕未成年だから買えないのだよ」
「私が買うから！！」
クロに引きずられ、宝くじ売り場の前に連れ出されてしまった。
「いろいろあるけどどんなくじが良いの？」
「ジャンボ？スクラッチ？ってよくわからないけど、結果がすぐに出るやつがいい！」
はいはい、スクラッチですねわかります。おばさん、そんなに微笑ましそうな目で見ないでください。
きっと兄弟と間違えられているんだろうな。
「スクラッチください」
「はい、２００円になります。この中から選んでください」

おばさんは１０枚位を扇状に広げ、クロが取りやすいようにしてくれた。
クロは、今までの短い付き合いの中で一番真剣な顔をしながらくじを選んでいる。
１０秒ほど見つめ選んだのは右から3番目のスクラッチだった。
お金をはらい端に移動する。

「貰ったけどどうやったら結果がわかるの？」

俺は財布から十円を取り出しクロに見せる。

「このお金で銀色に光っているところを削ると結果がわかるの。そうそう当たるもんじゃないみたいだけどね」

当たってしまった。
スクラッチの当たり金額は一般的な宝くじと比べると低価格だが、そのぶん当たりやすいとされている。だがそれでも１０万円を超える配当はそうそうでない。

「ふふふ……見てこれ！ハートのマークが一列揃ったわ！」
「マジで！？ハートってことは１０万円だ！クロやったぞ！！」

クロはニタニタ人の悪い笑顔を浮かべ、こんなの朝飯前とでもいうように胸を張っている。
俺は俺で小賢しい事を考え付く。
母親から買い物の予算を貰っていたが、これで使わなくても済む！
（浮いたお金でゲームが買える！）

クロも嬉しい、俺も嬉しい。良い事だー。

そのあとはクロの配当で服を買い、母のお金で俺とクロが出来そうなゲームを選んだ。クロは意外にもゲームに興味を持ち、自分好みのキャラを作れるアクションゲームに興味を持ったようだ。あと、結構余っているお金があったのでクロに財布も買わせることにした。

帰りはクロがリニアに乗ってみたいという要望から、歩いても帰れる距離をリニアに乗って帰路に着く。

因みにリニアとは磁気浮上式の電車みたいな乗り物で、長距離高速用リニアと在来線リニアがある。ある程度整備されている街だとリニアが当たり前になってきており、速度、乗り心地の良さ、また静かに運航出来ることから電車は一気に影をひそめる事となった。
しかし、人口の少ない街、急斜面の多い山間部などは採算、安全性の面からリニアは使用されていない。
ある種のオタに言わせるとリニアには面白みがない、電車にはロマンがある！などと言う返事が返ってきて、電車もまだまだ現役である。

あとあと聞いた話だがクロはある程度の運命に干渉することが出来、運命に大きな影響がなければ宝くじを当てることなど造作もない事らしい。
ただし、その都合のいい能力は自分と契約者のみにしか発動しないのであまり知られた能力ではないようだ。
みんなが知っていたら家の桜に参拝客が絶えない事になっていただろう。
そして、買い物で疲れ果てていた俺にさらなる悲劇が襲いかかる。
「ちょっと！」
ビクン！！
思わず肩が跳ね上がる。この声は、そして、この言葉の意味は……！
「ひー、ハイ！！」
「一昨日家にいるからいなさい。って言っておいたでしょ！？なんで出かけているのかな！」
怒れるハルカさん登場！やべー。クロのせいでこっちの予定すっかり忘れていた！
ハルカのポニーテールは、猫が尻尾を膨らませているのを彷彿とさせるものがあった。頬も興奮して若干赤くなっている。あまり怖くないが、これ以上怒らせるのも得策ではないので素直に謝る事にする。
「ごめんなさい！！」

これが俗に言うスライディング土下座である。

2月1日　夕方（後書き）

データ移し間違えました。
火曜日以降に若干の修正を入れるかもしれません。

ちなみに、本文には全然関係のない文章なので、このまま読んでも問題はありません。

聞いてない！

クロは闖入者を品定めするかのように見つめる。

おや、可愛らしい子だ。まさに怒り心頭というような顔をしているが、整った顔立ちのせいかあまり怖くない。これが綺麗な顔立ちをしていたら、さぞ迫力のある顔をしていただろうな。

しかし、雄輝も隅に置けない奴だ。どの様な関係かは何となく分かるが、本人たちは自分たちの気持ちから目を逸らしているようなので、あえて言わなくてもよいだろう。

契約している麒麟も高位の麒麟であるように見受けられる。

「人がせっかく誕生日兼チョコレートを持ってきてあげていると言うのに！母さんと私くらいしか、雄輝にあげる人いないんだからね！」

「すんません！でもチョコと誕生日プレゼントは別が良いです！」

そう、俺の誕生日はバレンタインデー、誕生日プレゼントがチョコレートと言う事はざらにあった。

「わがまま言わないの、貰えるだけありがたいと思ってよね！」

ハルカは雄輝から視線を逸らし、赤い顔を隠そうとしているがどう見てもばればれだ。

そしてと言うべきか、だからと言うべきか視線を逸らした先に見知

らぬ人がいることに気付いた。

「え？」

そう、幼馴染（ユウキ）と漫才もどき、また、友人には犬も食わない様な事と良く揶揄されるやり取りを繰り広げていたのである。

「えーーー！！？ちょっと、これはいつものやり取り的なもので、別に付き合ってるとかじゃなくて、幼馴染のじゃれあいみたいなもので……！」

ハルカとしては初対面の人にあらぬ誤解をかけられぬよう、また羞恥心も混ざって分けの分からない事になっていた。そして冷静になるにつれて、あれ？この人誰だろう？雄輝の親戚でこんな人いたっけ？幼馴染で家族ぐるみの付き合いをしていたからなる発想だ。決してストーカーだからとかではない。

（雄輝に彼女！？？いやいやいや！！ないない、こんな美人連れてこれるわけないし、だいたい雄輝にそんな甲斐性はない！）

ハルカの頭を悩ませている雄輝はそんなことは露知らずに、そういえばクロの事話してなかったなー。とパニックに陥っている幼馴染を放置した。

パニックに陥っているハルカ、なんだか笑いを堪えている様な顔の

クロ、我無関心な雄輝の三人は暫くお見合い状態が続き、そして、一番聞きたい事のあるハルカが雄輝に向って足を進めた。

「雄輝！！ちょっと！」
「え！？いきなり引っ張んなよ！」

雄輝をずるずる引きずり、当初いた場所から１０ｍほど離れた位置に移動しクロに背を向けて問いただし始めた。

「あの人誰？あと、なんで家にいなかったのよ」
「まあまあ、落ち付けって。なんかお母さんみたいなこと聞くなよ」
「良いでしょ！それとお母さんみたいとかって言うな！」

（あ、なんか話がそれてきている。長くなるなら家に上がっていても良いかなー？）
クロは事態の収拾をとうにあきらめて、二人の様子を眺めていると状況を打破できそうな人間がやってきた。

「あれ、なにやっているんですか？」
「さあ、痴話喧嘩か何かだと思うんだが。家に入っていいかなぁ？」

雄輝の弟の幸樹がやってきたのである。

「そうですね。あの二人、ああなると長いんですよ」

長年一緒に過ごしていたのであろう、こういうやり取りになれている様子がうかがえた。

「おーい、クロさん家に入りたいって言っているから後は家でやって」

年下の大人気のある対応に雄輝とハルカはほほを染め、お互い気まずそうにしていた。

「清水ハルカです。先程は失礼しました。」

「いやいや、面白いものが見れたよ。私はさっき紹介されたようにクロだ」

居間に上がり、幸樹が説明下手の雄輝に代わってハルカに事のあらましをすべて話していた。ハルカも心の片隅で雄輝の守護についてあきらめていた所があったのでクロの事を大いに驚き喜んでくれた。

ちなみにその間役に立たなかった雄輝は、弟にお茶菓子をお出ししろだの、お茶を入れろだのパしられていたのは言うまでもない。

ちなみに茶菓子はハルカが焼いてきてくれたガトーショコラだ。

適度な甘みと苦みで非常に美味しかった。

当初、雄輝やハルカがクロを人だと勘違いしていたのは、クロが人型だったのはもちろんのこと、龍や麒麟、精霊の類はあまり人前に姿を見せないからだ。
完全な人型に化けるのは複雑なテクニックと自分の力を制限する能力が求められる。なので、大火力重視の龍は比較的化けるのが苦手だとされている。麒麟はその点に関しては問題ないが、警戒心の強い生き物なので自ら隙をさらす事はしない。妖精は全体が光ってしまい、最早化ける意味すら存在しない。
そして、龍も麒麟は化けても体色の色が毛髪等に現れ、人目を引いてしまうのであまり使用しないのである。

クロは名前のとおり元の色が黒一色の龍なので、化けていると日本人と遜色ない色合いになる。

聞いてない！（後書き）

遅くなりました。
卒論とバイトでてんてこ舞いです。
改行が変だな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8196z/

黒い竜と白い竜

2012年1月14日11時45分発行